

戦前・南洋の日本人町を歩く

第五部 からゆきさんの町サンダカン(上)

作家
太田尚樹

●おた・なおき 1941年生まれ。東海大学名誉教授(スペイン文明史、比較文明論)。スペインに関する著作からノンフィクションまで幅広く執筆。最新刊は、『乱世を生き抜いた知恵 岸信介、甘粕正彦、田中角栄』(ベスト新書)。

日本を魅了したボルネオ島の資源

フィリピン群島の南西、スマトラとセレベスの間にボルネオ島はある。島といっても、日本の本州の三倍もあるから、かなりの大きさである。

そのボルネオ島は、戦前の日本には特別の意味をもっていた。豊かな油田と鉄鉱石、奇怪な熱帯雨林が奥地にまで伸びるこの地に、熱い視線が向けられていたからである。なかでも石油が喉から手が出るほどほしい日本海軍には、天然資源の宝庫と映っていた。

かえりみれば、二十世紀は石油文明の時代であった。石油は二十世紀に入ると、それまでの石炭にとって代

わる革命的エネルギーとして注目されるようになり、一九〇三年に米国のライト兄弟が初飛行に成功すると、またたく間に航空機の時代になった。



さらに日常の移動・輸送手段として自動車の実用化され、船舶も高速化時代に入って重油が燃料になってきた。石油文明の時代の到来であり、〈油を制する国は世界を制す〉となってきた。ところが日本はといえば、油も鉄鉱石も、ほと

んどを米国に依存していた。ちなみに日米開戦前夜、輸入する石油の八十五パーセントを米国に依存しているありさまである。

そこで開戦が避けられなくなると、石油の宝庫蘭印(現インドネシア)として、ボルネオは日本の生命線となってしまった。

サンダカンの妖しき灯火

ボルネオは、別の意味でも日本人の関心を呼んでいた。戦前の作家高崎隆治は、謎の多い作家仲間の里村欣三の生涯を、『ボルネオの灯は見えるか』のなかに、〈里村は異界の地ボルネオに、自由を追い求めていた。なかでもサンダカンに行きたがっていた〉と書いている。戦前のボルネオは英領とオランダ領に分かれていたが、サンダカンは英領北ボルネオにあった。

では里村欣三は、ボルネオ・サンダカンの何に憧れていたのか。となると山下奉文中将率いるシンガポール攻略戦で、従軍作家としてマレー半島を攻め下ったときに、途中から姿を消した前歴があったことがカギを握っている。

後に昭和十八年(一九四三)、突如ボルネオのサンダカンに現れた里村は、〈あの三週間は本当に自由だった〉と言っている。謎につつまれた脱走従軍文士の自由とは、軍隊に拘束されない自由というよりは、猛獣や毒蛇、奇怪な野鳥やオランウータンなどが棲息し、人食い人種もいるといわれた異界の地に、えもいわれぬ生命の輝きを見出したのか。あるいは、実際にサンダカンに行く以前からぜひ行きたいといっていたので、からゆきさんたちの実態を見つめてみたかった可能性がある。

実体のないロマンとしての南洋

そこで南洋に渡っていく大和撫子の話になるが、彼女たちの総称(からゆきさん)とは、唐人行(からひとゆき)、または唐ん国行(からんくにゆき)が短縮された言葉だそうだ。幕末から昭和初期にいたるまで、中国大陸や東南アジア、アメリカまで渡ってゆき、売春行為をして日本に送金していた女性たちのことである。

そのなかでも、近代日本女性史研究家山崎朋子の『サンダカン八番娼館』で、社会的に注目されるよう